

『はるかなるヒマラヤ 自伝と紀行』(坂本直行著)

八十路を越えると体力の激減以外にも特に眼とアタマの働きが極端に鈍ってきた。その良い例が本を読むのが面倒になってきたことである。本を拵けてものの2ページも読まない内に活字睡眠薬の効果が観面に顕れて夢幻の世界に沈没することになる。更に悪いことには、たった今読んだ本の内容が全く記憶に残っていないので、同じ本の同じ頁をグルグル廻っているだけでサッパリ進まないという塩梅にもなる。

いつの頃からか、買って来た本を脇目も振らずにその日の内に読み切ってしまうというようなことも無くなり、大概是読み続ける気力もどこかに消え失せてしまって積読(ツンドク)となるのが関の山である。

(特に最近の山岳書の類はノウハウ物やヒケラカシ物が多いと感じるので余り触手が伸びないということもある。これも老化現象のひとつか?)

そのような訳で、最近では昔読んだ本の中で頭の隅に多少は残っている本を本棚の隅からゴソゴソと探し出して再読してみる機会が多くなった。“ホウ、こんな本も読んだツケなあ?”というような忘却の彼方になっている本も多いが、読んで行く内に記憶の泡が沸々と湧き上がって来て一気に読んでしまうような本もある。そのような本を一冊紹介したい。

この本の著者は既に40年程前に鬼籍に入られているが、北海道で開拓農民として原野を開拓しつつ一方では忙しい農作業の合間を潜って山に登ったり山や草木の絵を描いたりした人で、北海道文化賞にも輝いた人である。ホワイト・チョコレートの六花亭の包装紙の草花を描いた画家と言えは或いは想い出される方もおられよう。幕末の志士坂本竜馬の子孫であることは余り知られていないが……。

本書は、北海道の開拓農民としての苦労話、また後年のヒマラヤのスケッチ・トレッキング紀行を中心に日高山脈や大雪山の登山随想などを、スケッチの挿絵も交えて描かれた一冊である。

開拓百姓の頃の自伝を読むと、食うや食わずの苦しい開墾農業の毎日の中でよくぞ山にも登り、また1万枚ものスケッチを描いたものと感心させられるが、普通の人間ではとても耐えられないような苦労を明るい筆致でサラリと軽妙洒脱に書き飛ばして読ませてくれる芸はタダモノではない。また、お上に言うべきことは筆を曲げることなくきちんと主張されている。流石に竜馬の血を引いているのであろう。

往時の北海道の日高山脈はまだまだ人跡未踏の峰々が残っていた時代であったそうで、読者としての登山の興味も尽きないが、圧巻はヒマラヤ・スケッチ・トレッキングの紀行とスケッチ挿画であろう。

そのヒマラヤ・スケッチ道中のコースが偶々私も歩いたポカラからカリガンダギ溪谷に沿ったムクティナートへの路であったり、またエベレスト街道であったりしたので、著者が往時辿った今から半世紀前のトレッキング道中がどのようなものであったのかを想像しながら一気に読んだ。私が行った10年前と較べながら読むのも楽しかった。また、併載されているヒマラヤのスケッチ絵葉書(The Nepal Himalayasの8枚)もほのぼのとしてヒマラヤの情景を髣髴とさせる佳品であった。

一冊の本に纏められて新刊本として発行されて以来既に10年以上になり、また書かれている内容も半世紀前の本を今になって紹介するには些か気が引けるが、既に書店では在庫切れになっており、僅かに出版元に若干の在庫が残っている今でないとなかなか手に入りにくい本になっている現在、ヒマラヤの同じ道を歩いたご同輩も多いと思うので、一読をお勧めする意味から敢えて紹介した次第である。

北海道出版企画センター 2011年7月発行、本体2,400円



(2023年4月 記)